

JM-3 全国筋ジストロフィー病棟における人工呼吸の現状

独立行政法人国立病院機構徳島病院小児科 多田羅勝義

【目的】筋ジストロフィー病棟における人工呼吸関連事故をいかに防ぐかが重要な問題となっている。そこで政策医療として筋ジストロフィー医療を実施している全国27施設、60病棟に入院中患者の人工呼吸管理状況を安全面から検討した。

【方法】27施設へのアンケート調査としたが、回答率は100%であった。2003年10月1日時点で入院患者は2193名で、うち1009名(47.2%)の人工呼吸患者を対象とした。1009名中610名(60.5%)非侵襲的陽圧人工呼吸であった。

【成績】病棟別に人工呼吸実施率をみると、最高は37名中34名(91.9%)であり、最低は14名中1名(7.14%)であった。人工呼吸実施患者は60病棟中30病棟で50%以上、60病棟中52病棟で10名以上が人工呼吸といった現状であった。使用されている人工呼吸器は45機種、1189台で、大部分がポータブル型人工呼吸器であった。また一施設あたりの台数は16～109台、機種は一施設あたり3～11機種であった。これらの病棟の夜間勤務スタッフはいずれの施設でも2～3名であった。

【考察】離脱のない人工呼吸を余儀なくされる筋ジストロフィーでは、人工呼吸下での患者生活の質の向上も重要である。従って療養型病棟での人工呼吸、さらに在宅人工呼吸の場合と同様に病室外での使用もあり得る。またすべての患者が人工呼吸対象となり得ることから、実施者が非常に多いが、この数字は今後さらに増加するものと予測される。特に夜間は少人数のスタッフで管理することになり、生体モニタリングの活用は不可欠と思われる。しかしその方法に関しては離脱のない人工呼吸と言うことも充分考慮されなければならない。人工呼吸器自体のアラームシステムに関しても、ポータブル型人工呼吸器で換気量アラームを装備しているものは非常に少ない。また医療の場であると同時に生活の場でもある病棟がいかなる構造であるべきかも検討を要する問題である。以上のような問題点を考慮するに、筋ジストロフィーの人工呼吸をいかに安全に管理するかに関しては、集中治療室での人工呼吸管理とは別の対策が必要となってくる。